Japanese association of educational psychology

観察経験に伴う観察者の変容（1）
―観察記録の相違点から―

市川洋子　　無藤 隆
（お茶の水女子大学大学院・お茶の水女子大学）

【目的】質的研究をにおける方法論（名人芸に終わらない観察やフィールドノーツ、研究のまとめ方、問いの立てかた等）をどのように教えられるのか、その訓練の仕方について確立していく段階にあることが言われている（発心、2001）。本研究では特に授業観察にしぼって記録の取り方が観察経験やその後の話し合いを経てどのように変容するのかについて検討する。

これまでフィールドワークの技法（箕浦、1999）やフィールドワークの授業についてのエスノグラフィー（佐藤、1999）について書かれているが、観察者側の変容に焦点をしぼって観察者がどのように変容していくのかについての知見は質的研究の訓練を考えるうえで、重要であると考えられる。

もう一つの研究意義としては教職の授業として実際の授業を観察することの意義が明らかすることである。

具体的には、学部生を対象にした小学校観察を行なう実習授業を受講した学生を対象に、観察初期と観察終了後の計 2 回にビデオの授業を見ながら書いてもらった授業記録を今回は分析し、その相違点と生じた理由について検討する。

【方法】実習授業の概要：この実習授業は学部生向けに、実際に小学校へ赴き観察技法の取得と授業や子どもの理解を目的として行なわれた。具体的には 4 月に実習授業のガイダンス、ビデオ使用の説明等が行なわれ、5 月から 7 月初旬、10 月から 12 月初旬まで毎週 1 回約 2 時間の授業観察を行い、観察後は授業や子どもの様子について話し合い、次週までにＢ５一枚程度のレポートを提出するかたちで進められた。観察については観察前に小学校各学級の担任に気になる子を挙げてもらい、その子を中心に撮影するように努めた。撮影記録やレポートはすべて学級担任に渡していた。なお、小学校の都合で観察に入れない時は、授業研究の論文講読や教師の経験談、授業に対する質疑応答等が行われた。

実習授業受講生の特徴：学部生 8 名と研修で来ていた小学校教師１名の計９名。

観察授業の特徴：都内小学 2 年生 3 クラス。観察を行なった授業は創造活動、ことば、かずの時間。

分析方法：今回は年間を通して受講した９名に対し、観察初期（6 月）と観察終了後（12 月）にビデオに撮影されている授業（岩波シリーズ国語「字源を探る」）を見ながら授業記録と感想を書いてもらった。それら二つの時期の記録と感想の相違点とそれが生じた理由として推測されるものについて各自記述してもらい、それらを本研究では分析した。

【結果と考察】まず、観察者が記述した＜授業記録の変容＞を整理した。観察経験を重ねることにより①観察記述がより詳細に正確に量的にも増加し、②記述効率化の工夫（事実収集につとめ考察は後で/記述の記号化）がなされ、③授業全体を考慮に入れた記述（文脈の考慮）が増えることが示された。次に観察者の考察の仕方に焦点を当て、＜授業の感想にみられる変容とその要因＞を検討したところ①断片的な場面の考察から授業の流れを加味した考察へと変容すること②自分の観察の癖に気づき他の視点も考慮した考察へと変容することの 2 点が各観察者によって自覚されていることが分かった。これらの意識の変容が生じた理由として観察者は、同じ学級同じ児童を複数の観察者で検討したことにより他の観察者と自分との感じ方考え方の違いを発見し自分の観察の癖といった内省に向かい自分がよくみえるようになったことを挙げていた。

以上から、本研究では、実際に小学校の授業を観察することによって観察者の観察記録や考察がどのように変容していくのかを検討した。しかしこの結果はビデオに撮影された授業に対する授業記録であり、何度も同じフィールドに入り観察をしていく中で見えてくるその場の歴史や関係性は考慮されていない。また、この記録をもとに後で様々な事柄を加えてフィールドノーツを作成することを考えると本研究では観察時の記録そのものを検討していることになる。また今回は 1 年の観察経験に伴う観察者の変容に限定されている。これらのことは次回に小学校観察毎に受講者によって提出されたレポートの変容を追うことでい検討したい。

NII-Electronic Library Service